

平成 2年 3月31日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859)

日向和田の水生昆虫相が示唆するもの

『青梅市内を流れる多摩川の清流を保護することは、文化財保護とはまったく異なった大切な課題です。』この文は、著者の文化財ニュース第19号の書き始めの文です。今回は、少し前になりますが、昭和49年に著者が日向和田で水生昆虫相を調査したときのことをお話いたします。日向和田駅下の多摩川の川底が一面、石灰でおおわれている光景を見たときは、大変な衝撃を受けました。水草は枯れ果て、小さな虫はおろか魚影もまったく見当たりません。少し大げさですが、公害で地球上の生物が死滅するくだりを書いたラヒュール・カーソンのフィクション「静まりかえった春」の一場面を見る思いがしました。

日向和田駅近くの石灰採掘場からとおぼしき、石灰水の流入口より距離を変えて水生昆虫相を調査した結果が、下のグラフです。流入口より50m地点では、水生昆虫の激減がみられましたが、100m下流地点では、数種類の復活がみられます。現在では、この石灰工場の操業は止まっていますが、もし継続されていたらその影響はさらに拡がっていたことでしょう。このグラフに表れているように自然は、たくましい面と同時にきわめてもろい面の両面性をもっています。前者だけに目を向けているのは、人間のおごりというものでしょう。後者の面についての認識を深めることが、真の自然への畏敬の念につながるのだと思います。文化財への畏敬の念と同時に、自然への畏敬の念を持ち合わせることを私達市民に課せられた今日的課題であると心から思う次第です。

青梅市日向和田における水生昆虫相の変遷

(文責 橋上一彦)